学校創設の初心に学ぶ

源流をつくった無名の若者たち

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

発刊の言葉

私立学校は、設立者の人材育成に対する強い「思い」から設立されます。東京都市大学の一つの源流である武蔵高等工科学校は、学生自らが「学びたい」という一心のもとに創立した学校です。１９２９年のことです。

もう一つの源流は、五島慶太翁が１９３９年に開校した東横商業女学校です。この二つの源流は１９５５年の学校法人 五島育英会設立により合流し、２００９年には東京都市大学グループが誕生します。慶太翁は五島育英会を設立するときに「将来、慶應や早稲田に匹敵する総合大学にする」と言われていますが、その実現に向けて進んでいると言えます。

日本は、明治時代に入り、急速な西洋化を進め、日清、日露戦争の勝利とその後の経済大発展を果たします。そして、第1次世界大戦後の戦後恐慌の時代を迎えます。１９２３年には、関東大震災がありました。欧米では、19世紀後半に電気、鉄鋼、石油、化学などでの技術革新が牽引する第2次産業革命を迎えています。武蔵高等工科学校と東横商業女学校は、その様な激動の時代に設立された学校です。

今の日本は、経済の安定成長期が終焉した１９９１年から始まった「失われた20年」から、いまだに脱出できずにいます。１９６０年代から築き上げてきた科学技術立国日本は色あせ、世界第２位の経済大国のポジションからも落ちてしまいました。この間、中国、インドをはじめとするアジア諸国の科学技術分野、産業の伸びは目を見張るものがあります。この日本を再び世界からお手本にされるような国にするには、どうすればよいのでしょうか。日本が世界に誇れる資源は「人材」であり、その教育が決め手となります。

今、我々は、ＩｏＴ、ＡＩが牽引する第４次産業革命、ソサエティ5.0の真っただ中にいます。２０４５年には、ＡＩが人間の能力を超えるとの予測もあります。それをうのみにする気はまったくありませんが、社会の枠組みが大きく変わることは予感されます。そこでは、地球上の誰一人として取り残さないことを誓うＳＤＧｓも重要です。新しい社会づくりに正面から向かっていく気概が求められています。このような時代にこそ、都市大の源流を築いた先達に学ぶことが重要です。

東京都市大学 学長
三木千壽

目　次

「震災復興」――若者たちの志が学校つくる……5
WHO？ 奔走した若者たち……6
「武蔵の夜明け」……8
技術の力で「首都復興」に貢献……11
「大崎の廃屋工場」みんなの汗で学び舎に……13
建学の精神は「公正 自由 自治」……17
大森「芽生えの地」は、いま……19
大森→大崎→大岡山→尾山台
よき環境を求めて……19
もう一つの源流「東横商業女学校」……21
東京都市大学の「稀有な歴史」を伝えたい……24
沿革……27

学校創設の初心に学ぶ

源流をつくった無名の若者たち

「震災復興」── 若者たちの志が学校つくる

私たち東京都市大学の源流は、1868年の明治維新から60年あまりが経過した昭和の初期、1929年に「福澤」でもない、「大隈」でもない、「新島」でもない名もなき10数人の若者たちが、東京の城南地域（東京南部の多摩川の下流域、品川、目黒、大田、世田谷）、いまでいう「下町ロケットの地」に、誕生して間もない「東京高等工商学校」（芝浦工業大学の前身、開校時の所在地、東京府下荏原郡大森町）を、飛び出したことから始まります。

その多くが町工場で働きながら「実験や実習」で腕を磨きたいと、昼間部や夜間部に通っていた若者たちは、学校の授業内容に満たされないものを感じていました。改善を求めて学校と話し合いをすると、「放校処分」を受けてしまいます。

近代日本を代表する私立大学の創立者たち

福澤諭吉
（1835 ─ 1901）
慶應義塾大学　建学1858年

大隈重信
（1838 ─ 1922）
早稲田大学　建学1882年

新島 襄
（1843 ─ 1890）
同志社大学　建学1875年

リーダー格の3人の若者たちは同志を集め、近代日本のインフラを築くために不可欠な学問である「電気」「建築」「土木」（後に「機械」増設）の技術を身につける学校をつくりたいと、奔走します。

時代は、首都・東京に壊滅的な打撃を与えた関東大震災（1923年9月）の発生から6年、社会が「喪失と混乱と不安」のときから立ち上がり、復興が本格的に軌道に乗り始めたころでした。

WHO？ 奔走した若者たち

放校処分を受けた若者たちは、3人のリーダーを中心に在校生に呼びかけ、当時、校舎のあった大森から、そう遠くはない三田の慶應義塾大学から講師として来ていた及川恒忠先生たちに実情を訴え、解決策を模索します。

東京都市大学図書館に保管されている前身の「武蔵工業大学30年史」（1960年、五島育英会発行）や「武蔵工業大学50年史」（1980年、同）などの資料や、東京・神田

武蔵高等工科学校同窓会 武蔵高等工科学校学友会の
会員名簿（昭和14年12月現在）

の古書店から入手した『会員名簿（昭和14年12月現在）武蔵高等工科学校同窓会　武蔵高等工科学校学友会』（6P写真）から若者たちの人物像が浮かび上がってきました。

いまのように新幹線や飛行機便がなく、故郷を出て東京で学ぶことが、非常に困難だった時代に、東北の秋田県や福島県、西は山口県と、列島各地から広く学生が集まっています。生年月日が記載されていないため、正確な年齢は不明ですが、旧制中学卒業が入学資格であることから、多くは10代の若者たちと推定されます。

「3人のリーダー」

宮尾　薫　さん（新潟県出身　1931年電気卒）

柳田　次郎　さん（山口県出身　1931年建築卒）

佐藤　康実　さん（福島県出身　1931年土木卒）

「同志たち」

谷　貞次　さん（東京都出身　1931年電気卒）

木内　忍　さん（出身地不明　教職員、学生名簿に記載なし）

東海林　稔　さん（秋田県出身　1931年電気卒）

林　昇　さん（山口県出身　1931年建築卒）

花塚幹二郎さん（栃木県出身　1931年土木卒）

ほかに数人の若者たち（氏名、確認できず）

「武蔵の夜明け」

「入学から放校処分、新たな学校創設へ」と、学生たちにとって激動の記録をメモとして残していたOBがいました。その回想録を紹介しましょう。

学校側との話し合いが不調に終わり、抗議の意志を込めて「同盟休校」を決議すると、リーダーが放校処分を受ける。最後の手段として、学生たちは自分たちの行動に、理解を示していた慶應義塾大学法学部教授の及川恒忠先生の世田谷の自宅を訪問します。深夜まで先生の帰宅を待ち「未明の陳情」が始まります。

―― あるOBの回想録より抜粋 ――

1928年4月に「東京高等工商学校」（現在の住所は大田区大森北6丁目）へ入学したが、入学式もなく早速、講義開始。学生が理解しようがしまいが、お構いなしの講義で、誰かが質問すると先生は頭からしかり飛ばしていた。授業時間表を見ると歯抜けで、おまけに休講が多く、専門学校の授業とはこんなものかとあきれたが、2か月が過ぎる。

7月になって、学友会の委員（自治活動組織）が学校本部の実験室をみたところ、実験器具がな

にひとつないことを知る。学校側に陳情し、学校の設置者に面接を試みたが、一蹴されてしまった。

9月になって、本校（大森ではなく芝浦）で専門科目の授業を受けた。時間表は相変わらず不規則で実験などはなく、週2時間くらい薄暗い部屋で製図をしたくらいのものだった。

12月に入り、昼間部の1、2年生が一緒になり夜間部の学生も交えて、再三、設置者に面会を求めた。しかし、学校側は「学生は学校の方針に従っておとなしく勉強すべし」との回答だけだった。

翌1929年3月の春休みに、学校側は新1年生用に教室（平屋建て）を建て増した。4月の新学期に新2年生が、今までの話し合いの経過を報告し、「設置者から、誠意ある回答が得られないときは、同盟休校する」と決議した。新1年生も行動をともにすることになった。

5月の初めに神田錦町の学士会館で、設置者との会見が行われたが、不調に終わり翌日から同盟休校に入る。1週間後、学校側は、2年生リーダー全員の「放校処分」を校庭に掲示し、各人にも自宅あて「呼び出し状」を郵送した。

放校処分を知ったリーダーたちは、「学生全員、総退学しよう」と呼びかけ、学生全員（約500人）が退学届を提出した。

学生たちは、慶應義塾大学法学部教授で、この学校で非常勤講師として教鞭をとっていた及川恒忠先生に、これまでの経緯と将来について話をし、協力をお願いした。再三にわたり陳情をしたが「学校経営の意志はない」と、断られた。

学生たちが最後にとった行動は、大森の校舎から10㎞も離れた世田谷・下馬にあった及川先生の

自邸に、代表者10人で訪問し、お願いをすることだった。「これだけやってダメなら、その時は学生各自で将来に対して進む道を考える」という決意を固めていた。

１９２９年６月、昼間部、夜間部生の代表が訪問したが、「先生は不在」。門外で待ち続けると、真夜中の午前１時ころ帰宅し会談に応じてくれた。学生の陳情を黙って聞いていた及川先生は、「学校経営などは考えてもなかったが、君たちの熱意には負けた。５００人の青年（当時の在校生）が、一時にせよ路頭に迷うということは重大問題でもあり、他人事とは思えない」と語った。

「私立の高等工業を設置する、という目標で努力することを約束する。自分には実業家の西村有作という学生時代の親友がいるから、西村と相談するつもりである」。会談中、停電が起きた。先生がローソクを灯し静かに語る。学生の中には感極まって泣き出すものもいた。

（「創設の真相」１９３１年電気卒）

１年の中でも、最も太陽が力を増す６月の夏至の朝が、明け始めていました。

学校創設の源流をつくろうとする若者たちの熱情が、幕末期の１８５８年に福澤諭吉が、東京・築地で始めた「慶應義塾」の志を受け継ぐ先師、及川恒忠先生のこころを動かしたのです。

１９２９年初夏、多くの苦難を抱えながら、師弟たちにとっての「武蔵の夜明け」が始まりました。

技術の力で「首都復興」に貢献

首都東京は、横浜などとともに関東大震災で壊滅的な打撃を受け、6年が経っていました。当時の時代状況は、300年近く続いた江戸幕府が幕を閉じ、明治の「新国家建設」「富国強兵と産業振興」が進み、欧州では第1次世界大戦、そして経済不況が地球全体を覆う「世界大恐慌」が起きています。

関東大震災とその時代

1923（大正12）年9月1日正午直前に発生、東京と横浜は大きな被害を受け死者・行方不明者10万600人、罹災者総数340万人、東京では市域（旧15区）の44%、3456haが焼失しました。

1995年1月の阪神・淡路大震災の死者・行方不明者は6000人余り。2011年3月の東日本大震災の死者・行方不明者は約2万人。当時の東京は、木造家屋が多かったとはいえ、いかにこの震災が巨大なものであったかが分かります。

東京の大改造を唱えていた後藤新平内務大臣（元東京市長）は、「帝都復興院」総裁として復興計画を立案

① 被災地3600haの区画整理

②「昭和通り」などの幹線街路整備

③ 隅田川に清洲橋など「復興10大架橋」を実施

大震災の2年後、東京・芝の愛宕山の放送所（ＮＨＫの前身）から日本で最初のラジオ電波が流れ、「大衆向け情報化」の第1歩を踏み出します。1929年、東京大阪間の中継放送開始。教育・学術面では、国内外の帝国大学の創設が一段落し、津田英学塾など語学や服飾教育のドレスメーカー女学院（現杉野服飾大）、工業、商業の専門的な私立の教育機関が新たな設立ブームに、そうした中で「武蔵」も産声を上げました。

関東大震災被災状況
「隅田川べりの蔵前にあった東京高等工業の惨状」

「武蔵高等工科学校」が大崎の地に誕生したのは、技術の力で「首都復興」への光をともそうとした「無名の若者たちの熱情」と、それを受け止めた3人の創立者たちの決断だと思います。

「大崎の廃屋工場」みんなの汗で学び舎に

及川先生の働きかけで、資金を援助してくれる人物が現れます。一刻も早い開校を実現しようと、大田区大森から北へ4㎞、そう遠く離れていない所に学校用地を探し出します。現在の東急電鉄池上線「大崎広小路駅」に隣接した場所で、廃屋のような木造2階建ての沖電気の電線工場が建っていました。

敷地面積は当時の小学校の校庭ほどもありません。目黒川に近い低地で、大雨が降れば、すぐに浸水してしまうような水はけの悪いところでした。高架を走る池上線の電車のブレーキのきしむ音や、振動も伝わってきます。

長い間、使われていなかったため、雨漏りはするし、窓ガラスは割れ放題になっていました。それでも総動員で修理や掃除に汗を流して建てた学び舎の完成に、学生たちの喜びは大きかったのです。

創立後、間もなくうれしいことがありました。関東大震災の市街地復興に当たっていた「東京市復興局」から、測量実習で使う「レベル」(高低差測定器)や「トランシット」(角度計測器)を大量に、しかも安価で提供を受けることができたのです。実社会にまだ、先輩もいない草創期、教職員も学生もこのプレゼントに大きな闘志を燃やしたそうです。

本学の創立者たち

西村有作
（1890 — 1959）

1929年、当時東工船（後の昭和工船漁業㈱）取締役などを勤め、資産家であった西村有作は、同じ慶應義塾大学の出身である及川恒忠に学校設立の資金の要請を受けこれを承諾した。学校経営は、財政面ではたびたび危機に直面し、五島慶太翁の援助で切り抜けたこともあったが、1944年頃は財政面、健康面からも学校経営は困難になり、五島慶太翁に経営を委ねた。

及川恒忠
（1891 — 1956）

1929年当時、東京高等工商学校の生徒らが授業の充実などを求めて同盟休校に入った。しかし学校側は要求を受け入れず、リーダー達を放校処分にした。学生たちは困って、当時慶應義塾大学法学部の教授をしていた及川恒忠に安心して勉学できる学校を作って欲しいと懇願。及川は度重なる生徒らの熱情に押されて、親友の西村有作に相談、西村が設立資金を出すことを承諾して学校の発足を決めた。

手塚猛昌
（1853 — 1932）

東洋印刷㈱社長など、印刷・出版業を営んでいた手塚猛昌は西村有作と同様に慶應義塾大学の出身者である及川恒忠から学校設立資金の出資要請を受けこれを承諾した。手塚は日本で初めての時刻表「汽車汽船旅行案内」を発行した"時刻表の父"としても有名だが、帝国劇場、横須賀電気瓦斯、東京市街鉄道（後の都電）の創業にも参加するなど財界人としても活躍した。

「校舎」と「正門をバックに学生の笑み」

１９２９年９月、当時の東京府の認可を得て「武蔵高等工科学校」（東京府荏原郡大崎町谷山１３３、現在の品川区大崎４丁目、入学資格は旧制中学卒業、３年制）が開校しました。私たちの東京都市大学の源流のひとつです。

現在、大崎広小路駅の高架下のコンクリート柱に、ステンレス製の「発祥の地のプレート」が設置されています。地味ではありますが、時代を超えて、「本当に学べる学校をつくりたい」という、先人たちの思いが伝わってくるようです。（２０１５年10月に設置）

2015年10月30日
発祥の地 大崎広小路に「記念碑創設」

1929年9月「創立時の各科、在籍者」

9月20日

電気工学科（昼間部96名・夜間部68名）
建築工学科（昼間部66名・夜間部27名）
土木工学科（昼間部59名・夜間部62名）
計　（昼間部221名・夜間部157名）

教員構成　非常勤講師が大半、創立者及川が将来の後継者として九州大学工学部電気工学科を卒業したばかりの赤野正信（武蔵工大初代学長）を迎えた。

10月17日
開校記念日と定める

12月1日
校長に竹内季一（池上電鉄五反田駅の設計者）が就任

目黒川を渡る池上電気鉄道線と大崎橋。
左側に見えるのが五反田駅。
当時、地表面から東洋一の高さを誇った。

「発祥の地」記念碑除幕式

東急池上線・大崎広小路駅前

建学の精神は「公正 自由 自治」

退学処分を受けた若者たちは、何を学校に求めたのでしょうか。

昭和の初期、義務教育である小学校の課程を終え、旧制の中学校や高等女学校への進学率は10％前後でした。現在の大学進学率が50％超ですから、上級学校へ進むことがいかに困難なことだったのかがわかります。

当時は経済的に余裕のある、ひと握りの家庭の子どもか、どんなに苦学をしても、向学心やみがたいという意志強固な、ごくわずかの若者たちだけが、実社会で飛躍するチャンスをつかもうと、学校の門をたたいたのです。

しかし、工業と商業の両課程をもって発足した「東京高等工商学校」は、1927年に開校して間もなかったこともあり、当時のOBの回想録にもあるように「授業時間は

公　正　「我々の志とは公正なる人格の陶冶と優秀なる工業技術の修得とにあるのである。」
及川恒忠「我が学園の若人に」学友会発会式演説要旨より

自　由　「真に自由なる人は先ず真に自尊の人であらねばならぬ。‥（中略）…
自ら自己に恥ぢることを知って居る人にしてはじめて自由たり得るのである。」
打村鉱三（教務主任）『武蔵高工学友会誌』創刊号より

自　治　「…この意味に於て学校は、諸君の自由･自治を慫慂する。諸君は完全に、正確に自治的であってほしい。
真の自由を心ゆくばかり享楽するがいゝ。」
打村鉱三（教務主任）『武蔵高工学友会誌』創刊号より

歯抜けで、そのうえ休講が多く、専門学校とはこんなものかと思った」というのです。「芽生えの地」―そのころの大森周辺は、東京湾の潮の香が伝わる「大森海岸」があり、東京名産の海苔の採取や、夏は海水浴客でにぎわう、漁業や商業の盛んな街でした。隣の蒲田には映画の撮影所もあり、京浜工業地帯として大発展する前の移行期でした。

3人の若者が中心になって起した行動が素晴らしいのは「そうした不満を、不満のままに終わらせず、大人たちに実情を訴え、理想とする学校をつくる」という信念で、切実で大きな課題を乗り越え、学校創設の源流をつくったことではないでしょうか。本学の建学の精神『公正 自由 自治』の芽生えを、ここに見ることが出来ると思います。

旧1号館（本館）前「建学の精神」碑
（現在は世田谷キャンパス 3号館 歴史展示コーナーに展示）

揮毫：山田良之助（1897～1990）
東京工業大学教授（工学部長）
静岡大学学長
本学第4代学長（1960～1978）

大森「芽生えの地」は、いま

大森は、東京都市大学にとって「創設の地」である大崎につながる「芽生えの地」です。実際に歩いてみると、90年の時を経て、若者たちが志を果たそうと思いをぶつけた「大森の校舎」は、跡形もありませんでした。

記録によると、毎年、新春に学生ランナーが健脚を競う「箱根駅伝」のコースになっている「第1京浜国道」と、東京の主要環状幹線道路である「環7」の交差点を西方向に進んだところです。京浜急行の「平和島」が最寄り駅で、JR京浜東北線の大森駅からも徒歩で15分ほどです。

環7に面してマンションや会社が建っていた

大森→大崎→大岡山→尾山台　よき環境を求めて

その後、よりよき教育研究環境を求めて1932年、目黒区大岡山へ移転します。東急線の大岡山駅の近くで、線路を挟んで向こう側には、震災後、蔵前から移り、1929年に東京高等工業から昇格した東京工業大学のキャンパスがありました。

「技術立国」の大方針のもと、武蔵高等工科学校の評価も高まり、志願者が増え校舎が手狭になります。機械工学科も開設され、大岡山には「第2校舎」も建てられました。

戦争への流れが加速する1940年に、丹沢山塊や霊峰富士を望み、研究環境としては都内でも屈指といえる尾山台の地へ移ります。多摩川べりの敷地は大岡山の約7倍、発祥の地「大崎」に比べ実に約16倍に広がりました。

■『4つのO(オー)』よき教育環境を求めて

Omori　Osaki　Ookayama　Oyamadai

もう一つの源流「東横商業女学校」

東京都市大学には「武蔵の源流」とは別に、もう一つ戦前からの女子の実業教育の源流もあります。1939年、東急コンツェルンを一代で築き上げた「昭和の実業家」五島慶太翁（1882―1959）を創設者として、等々力（現等々力キャンパス）の地に開校した「東横商業女学校」です。

長野県上田市の近郊、美しくも厳しい自然に囲まれた小県郡青木村の農家に育った五島慶太翁は、東京大学を卒業して官界に進む前に、当時の東京高等師範学校（現筑波大学）に学びます。

月謝のかからない「官費支給」の学校だったからです。経済的な苦労を背負いながら学んだ〝苦学力行〟の体験から、教育の機会の大切さを強く認識しており、何とかし

1939年4月 東横商業女学校の開校

「実物での教育」「科学的な教養」を基調に、多摩川にほど近い富士山を望む等々力の丘陵に誕生した。

入学式当日の東横商業女学校正門（4月10日）

開校式典で式辞を述べられる
五島慶太名誉校長（6月1日）

て日本の女子教育に新局面を開きたいという大きな望みを抱いていました。

月謝を抑え、「実物での教育」を通して、科学的な教養深い「数理に明るい」女子を育成しようと、理科教室と料理用の「割烹教室」、1教室40人が一斉に使えるタイプライターもそろえました。当時としては画期的なことです。初代校長は、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）から理科の吉田弘氏を招聘しました。

一方、武蔵工業大学が戦後の混乱のなかで、慢性的な財政不足に瀕していた際に、教育者であり強力なリーダーシップを持つ五島慶太翁に理事長就任の要請がありました。その要請を受け、慶太翁は武蔵工業大学と東横学園を合併し、新たに設立された学校法人「五島育英会」の理事長に就きます。

戦後の学制改革を経て、1956年に「東横学園女子短期大学」が誕生します。当初の「家政科」に加え、1966年には「英語英文科」「国語国文科」を設置。21世紀を見据えて改組統合を進め「言語コミュニケーション学科」を開設するなど、都会型の「強く、正しく美しく」というモットーを実践し、2万7000人余りの卒業生を社会に送り出しています。

2009年4月1日、「2つの源流」につながる武蔵工業大学と東横学園女子短期大学が合流し、東京都市大学が誕生します。幾多の歴史を経て、現在は「世田谷キャンパス」（理工学部、建築都市

デザイン学部、情報工学部、都市生活学部、人間科学部）、「横浜キャンパス」（開設1997年　環境学部、メディア情報学部）などを舞台に工学技術、人文社会科学、生活芸術文化および人間科学の分野を有する総合大学として教育研究を行っています。

東京都市大学の歩み

年	本学の出来事	年	同時期の日本・世界の出来事
1929	武蔵高等工科学校を開校 （電気工学、建築工学、土木工学の3学科）	1929	ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落 （世界恐慌）
1932	大岡山新校舎完成、移転	1932	五・一五事件
1934	機械工学科・設置	1934	B.ルースら米大リーグ選抜チーム来日
1938	（財）武蔵高等工科学校の設立 初代理事長、西村有作	1938	国家総動員法の成立
1939	東横商業女学校が開校	1939	ナチス・ドイツ軍ポーランド侵攻
1940	世田谷区玉川等々力町（現在地）に校舎を移転		第二次世界大戦勃発
1942	武蔵高等工業学校を開設 （電気工学、建築工学、土木工学、機械工学の4学科）	1942	ミッドウェー海戦
1949	武蔵工業大学を開設 （電気工学、建設工学、機械工学の3学科）	1949	湯川秀樹、ノーベル物理学賞を受賞
1955	学校法人東横学園と学校法人武蔵工業大学が合併し、学校法人五島育英会と名称変更	1955	トヨタ自動車がクラウンを発売
1997	横浜キャンパス開設	1997	消費税増税（3% → 5%）
2004	創立75周年	2004	アテネオリンピック開幕
2009	東京都市大学に名称変更 （現在、6学部18学科、2研究科）	2009	鳩山由紀夫内閣が発足
2019	創立90周年		

結びの言葉

東京都市大学　副学長　大上　浩（おおうえ・ひろし）

東京都市大学の「稀有な歴史」を伝えたい

東京都市大学のキャンパスは、かつては江戸、東京の「命の水」を供給した多摩川を挟んで、東京の南西部と横浜北部の丘陵地帯にあります。

世田谷キャンパスには、武蔵高等工科学校と東横商業女学校の流れをくむ、理工学部、建築都市デザイン学部、情報工学部、都市生活学部、人間科学部の5つの学部があります。すぐ近くには、品のいいおしゃれな街として知られる自由が丘や、田園調布の閑静な住宅街が広がっています。また、横浜の新しいまちづくりとして計画された港北ニュータウンには、環境学部、メディア情報学部の2つの学部を抱える横浜キャンパスがあります。

東京・横浜という都市の中で、都心部ではなく、世田谷と都筑の緑が多い落ち着いた環境の地を拠点とし、「武蔵」と「東横」が築いてきた伝統を礎として、東京都市大学は発展しています。

『学校創設の初心に学ぶ　源流をつくった無名の若者たち』には、「学校創設時の志のある若者たち」と「苦学

力行の巨人 五島慶太翁」が登場しています。勇猛果敢に『先人の扉』をたたき、自らチャンスをつくり、社会的な使命を果たしてきた人たちです。

「学びたい」という一心のもとに、学生自らが支援者、教えてくれる人と校地・校舎を探し求めたことによって創立したという経緯と、そこから生まれた建学の精神「公正」「自由」「自治」に込められた思いを、東京都市大学の新入生となった皆さんに伝えたく、この冊子を編纂しました。日本においてきわめて稀な、学生の熱意が創り上げた大学であることを誇りに思ってください。

東京都市大学の教育理念は、「ボーダーを超えて、学生と教職員が共に考え、学び、行動することで社会に貢献できる人材を育てる。」です。これは、さまざまな困難の中で、学生の希望とそれに応えたいという人の思いから、学生と教職員の区別などなく、ボーダーを超えて作られた大学であることを大切にしているからです。

この冊子は、本学の卒業生である理工学部機械工学科教授の白

世田谷キャンパス

横浜キャンパス

木尚人先生の全面的な協力と、元学長特命広報ディレクターであった角田光男氏の原稿をもとに制作されました。愛校心あふれる白木先生は毎年、新入生を対象とした講義の中で、本学の歴史をパワーポイントにまとめ、分かりやすく前向きに語っています。今回もその講義資料を存分に活用させていただきました。

昭和初期の若者たちが、自らの道を切り開くために、恩師や同志らとともに、情熱をもって苦難を顧みずに奮闘した「稀有な歴史」が本学創立の源流にあることを、皆さんひとりひとりの心に刻んでもらえればうれしく思います。

この冊子は、基調は話し言葉で書き下ろしました。みなさんの若い柔らかなこころに、建学の精神である「公正」「自由」「自治」を吹き込んでほしいと思います。

2022年 4月

等々力キャンパス
（2022年3月を以て世田谷キャンパスに2学部移転）

二子玉川夢キャンパス

沿革

1940年代　1930年代

1949年 武蔵工業大学 ◀ 1944年 武蔵工業専門学校 ◀ 1942年 武蔵高等工業学校 ◀ 1929年 武蔵高等工科学校

- 1949年 電気工学科 ― 1944年 電気科 ― 1942年 電気工学科 ― 1929年 電気工学科
- 1944年 電気通信科
- 1949年 建設工学科 ― 1944年 土木科 ― 1942年 土木工学科 ― 1929年 土木工学科
- 1944年 建築科 ― 1942年 建築工学科 ― 1930年 建築学科 ― 1929年 建築工学科
- 1949年 機械工学科 ― 1944年 機械科 ― 1942年 機械工学科 ― 1934年 機械工学科

武蔵工業大学世田谷キャンパス
（1940年代）

武蔵高等工科学校の校舎
（1929年創立当初）

東横学園女子短期大学開学式の
記念撮影（1956年）

東横学園女子短期大学の
校舎新築竣工式（1955年）

1939年 東横商業女学校

1929年	武蔵高等工科学校創立（大崎）
1932年	建学の精神「公正」「自由」「自治」
1939年	大岡山へ移転
1940年	東横商業女学校開校
1942年	尾山台へ移転
	実業学校令、専門学校令による武蔵高等工業学校開設
1944年	武蔵工業専門学校に改称
1949年	学制改革により武蔵工業大学に昇格
1950年	武蔵工業大学、短期大学部を開設
1955年	学校法人東横学園と学校法人武蔵工業大学が合併して、学校法人五島育英会に
1956年	東横学園女子短期大学開学
1960年	原子力研究所を開所
1966年	大学院工学研究科の修士課程、機械工学・生産機械工学・電気工学・建築学各専攻を開設
1968年	大学院工学研究科の博士課程、機械工学・生産機械工学・電気工学・建築学各専攻を開設。短期大学部廃止
1972年	大学院工学研究科修士課程土木工学専攻を開設
1979年	情報処理センター開所

1990年代　1980年代　1970年代　1960年代　1950年代

1985年 電気電子工学科

1969年 電子通信工学科

1957年 電気通信工学科

1997年 電子情報工学科

1957年 土木工学科

1960年 建築学科

1957年 建築工学科

1965年 機械工学科

1997年 機械システム工学科

1959年 生産機械工学科

1959年 経営工学科

1997年 エネルギー基礎工学科

武蔵工業大学横浜キャンパス
（1997年）

武蔵工業大学世田谷キャンパス
（1969年）

1997年 環境情報学科

東横学園等々力校舎

1956年
東横学園女子短期大学

1990年 生活学科

1969年 家政学科

1956年 家政科

1997年 言語コミュニケーション学科

1969年 国語国文学科

1966年 国語国文科

1969年 英語英文学科

1966年 英語英文科

1981年　大学院工学研究科に博士課程土木工学専攻と修士課程経営工学・修士課程原子力工学各専攻を開設

1992年　水素エネルギー研究センター設置

1994年　五島記念館竣工

1997年　横浜キャンパスに環境情報学部環境情報学科を開設。情報メディアセンター発足

1998年　横浜キャンパス、ISO14001の認証を日本の大学として初めて取得

1999年　文部省「ハイテク・リサーチ・センター整備事業」の「環」として、「エネルギー環境技術開発センター」を世田谷キャンパスに設置

2000年　産官学交流センター開設

2001年　大学院環境情報学研究科修士課程環境情報学専攻を開設。大学院工学研究科修士課程及び博士後期課程生産機械工学専攻を機械システム工学専攻に改称

2002年　大学院工学研究科修士課程及び博士後期課程土木工学専攻を都市基盤工学専攻に、修士課程原子力工学専攻をエネルギー量子工学専攻に改称。生涯学習センター開設

2003年　新14号館「SAKURA CENTER #14」（現 9号館「SAKURA CENTER #9」）竣工。大学院工学研究科博士課程エネルギー量子工学専攻を開設。王禅寺キャンパス原子炉の廃炉が決定

2010年代　2000年代

2009年
東京都市大学

2007年
電気電子工学科

2003年
電気電子情報工学科

2003年
コンピュータ・メディア工学科

2007年
都市工学科

2002年
都市基盤工学科

2008年
エネルギー化学科

2002年
システム情報工学科

2013年
医用工学科

2007年
生体医工学科

2003年
環境エネルギー工学科

2008年
原子力安全工学科

2007年
情報科学科

2013年
情報通信工学科

2007年
情報ネットワーク工学科

2009年
経営システム工学科

2007年
応用情報工学科

2009年
自然科学科

武蔵工業大学 総合研究所
（2004年）

2013年
環境創生学科

2013年
環境マネジメント学科

2002年
情報メディア学科

2013年
社会メディア学科

2013年
情報システム学科

2010年
東横学園女子短期大学閉学

2009年
都市生活学科

2005年
ライフデザイン学科

2009年
児童学科

2004年
保育学科

2004年
総合研究所を開所。新9号館（現　8号館　図書館棟）竣工

2005年
大学院環境情報学研究科博士後期課程開設

2006年
大学院工学研究科修士課程・博士後期課程システム情報工学専攻を開設。新4号館（建築学科棟）竣工

2009年
東横学園女子短期大学を統合。武蔵工業大学から「東京都市大学」に校名変更。大学院工学研究科博士前期課程・博士後期課程電気電子工学専攻、生体医工学専攻、情報工学専攻を開設

2010年
大学院工学研究科博士前期課程・博士後期課程エネルギー化学専攻を開設。大学院工学研究科博士前期課程・博士後期課程共同原子力専攻を早稲田大学と共同で開設。東横学園女子短期大学閉学

2011年
大学院工学研究科都市基盤工学専攻を都市工学専攻に改称

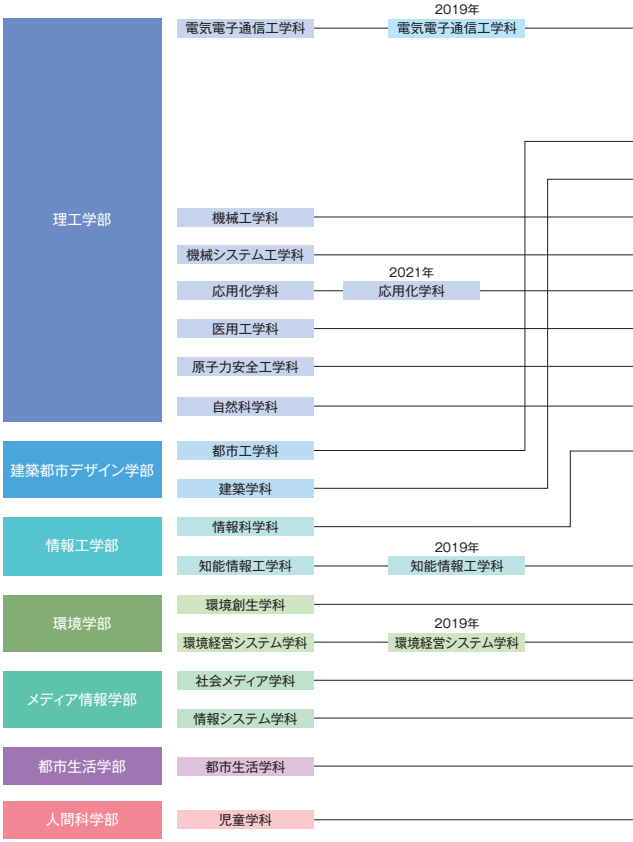
2012年
共通教育部を設置

2013年
大学院環境情報学研究科に修士課程都市生活学専攻を開設。環境情報学部を環境学部、メディア情報学部に改組。新1号館竣工

2015年
東京都市大学歴史展示コーナー開設

2018年
新6号館竣工。大学院工学研究科を総合理工学研究科に改称

2020年代

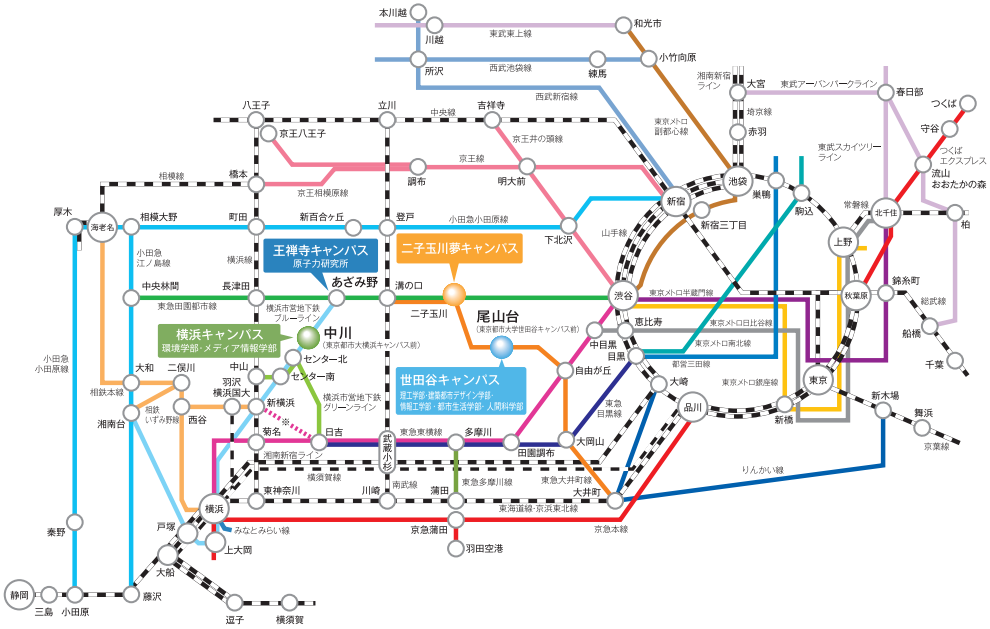


2019年
国際学生寮完成　創立90周年

2020年
大学院総合理工学研究科修士課程・博士後期課程自然科学専攻を開設。工学部を理工学部に改称。知識工学部を情報工学部に改称。建築都市デザイン学部を開設

2021年
大学院環境情報学研究科博士後期課程都市生活学専攻を開設。大学院修士課程の呼称を博士前期課程に変更

2022年
新7号館竣工。等々力キャンパスより、都市生活学部と人間科学部が世田谷キャンパスに移転



The South West of Tokyo

Since 1929

東京都市大学

TOKYO CITY UNIVERSITY

〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1 TEL.03-5707-0104(代) http://www.tcu.ac.jp